

『坂の上の雲』ふたたび

# 甦る日露戦争の時代

歴史の彼方から再浮上する東アジアの宿命の構図。いまこそ「明治のリアリズム」に立ち返れ！



渡辺利夫 松本健一  
拓殖大学学長  
評論家・麗澤大学教授

『坂の上の雲』の時代に逆戻り

松本 本誌四月号の「福澤諭吉の『脱亜論』に学べ」と題

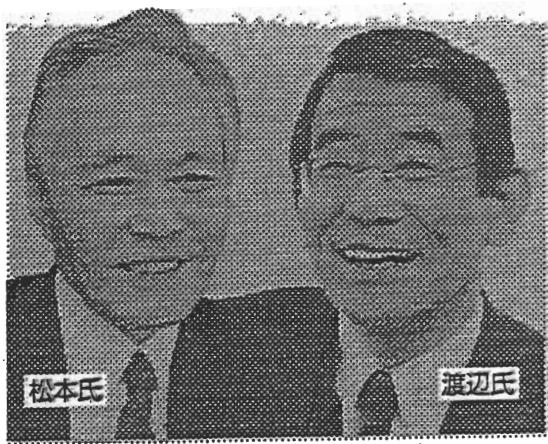
した渡辺さんの論文、じつに興味深い論考でした。冒頭、

（現在の極東アジアの地政学は、日清・日露の両戦争が戦われた明治のあの頃に「先祖返り」したかのように酷似している）  
といふ指摘は、私が冷戦構造崩壊の直後から提唱してきた「歴史の回帰現象」という視点とも一致し、「これだ！」と膝を打ちました。冷戦構造が解体された一九九〇年代前半以降、全世界に民族主義や宗教原理主義が澎湃として巻き起こり、各地で紛争が勃発していますが、わが日本を取り巻く東アジアの情勢も例外ではありません。この混迷の時

代を生き抜く指針として福澤諭吉の「脱亜論」を見直すべき  
という指摘も、かねがね私が考えていた「脱亜論とアジア  
主義の原点に立ち返るべし」という論と重なる部分が多く、  
たいへん参考になりました。

渡辺 松本さんにそう言われると、なんだか面映い  
(笑)。

（ご指摘のように、日本周辺には東シナ海への海洋進出の野望を剥き出しにした中国、核カードをちらつかせながら大國を手玉に取る北朝鮮、その北朝鮮に取り込まれつつある韓国、そして資源ナショナリズムが台頭するロシアなど霸権を狙うパワーがひしめきあう地政学的状況があります。いわば、日清・日露戦争時代を描いた司馬遼太郎の長編小説『坂の上の雲』の舞台設定とほとんど同じような状況に立ち至つ



たといつても過言ではありません。そこで、同じような状況に直面した当時の日本のリーダー達は、どのような思想を持つて日清・日露の両戦争に立ち向かったのか、今一度検証してみる価値はあるはずです。実際、福澤の「脱亜論」など当時の著作を読み込めば読み込むほど、そのリアリズムはいささかも古びていないことに気づかされます。

**松本** そこで今日は、混迷の東アジア情勢を分析しつつ、福澤の「脱亜論」や岡倉天心の「アジア主義」の原点に立ち返つたうえで、渡辺さんとともに日本の進むべき道を見通せたらと思います。

さきほど「歴史の回帰現象」と申し上げましたが、なぜ東アジア情勢が第一次大戦前の構図に似てきたのか、その理由から出発しましょう。冷戦時代は東西両極のスーパーパワーが激突し、世界の構図がすべて「自由主義vs共産主義」あるいは「米国vsソ連」という物差しで計られていた時代でもあります。それが、それゆえに民族・宗教間の対立や紛争などは二大陣営の力学の中に押さえ込まれ、顕在化することはなかったわけです。ところが冷戦後、東西の超大国の重石が外れてしまい、それまで押さえ込まれていた対立や紛争が世界各地で噴出してきました。その典型的な例は、旧ユーゴスラビアでしょう。もともと十指に余る民族と言語、キリスト教諸派およびムスリム勢力がモザイクのごとく複雑に入り組み、必然的に紛争の種を抱え込んでいた地域ではありますが、冷戦時代は共産主義とコメコン体制がこれらの火種を一切押さえ

込んでいました。しかし冷戦後、ボスニア・ヘルツェゴビナ内戦やコソボ紛争など宗教・民族問題が一挙に噴き出し、六つの国に分裂してしまいました。つまり、いざ冷戦が終わってみると、第一次大戦勃発の契機となつた「サラエボ事件」の頃に逆戻りしてしまったわけです。

この「歴史の回帰現象」は全世界的なトレンドであり、東アジアでも同様の事態が進行しているように思えます。

**渡辺** 「歴史の回帰現象」とは、いかにも松本さんらしい表現ですね。言い得て妙です。

冷戦時代とは、世界のいずれの国も米ソ二大陣営のどちらかに帰属していれば座り心地の良い座布団を与えられ、イデオロギー的に迷うこともない、ある意味ではじつに安定した時代でした。民族・人種・言語集団間の諍いも、この構図の中で押さえ込まれてきました。日本国内の五五年体制にも、左右両派が深刻な対立をしていくように見えて、じつに絶妙なバランスを保っていたとみることができます。北朝鮮が日本に向けてミサイルを発射するような事件も、ソ連の睨みが効いていた冷戦時代には到底考えられなかつたことです。そう考えると、「冷戦の頃は良き時代だったなあ」と懐かしささえ感じられます（笑）。

しかし今、世界はナショナリズムの炎に包まれ、民族や言語、あるいは宗教や人種などの原初的なエスニティ（小民族集團）に向かつてひたすら回帰している状況です。そこに働くのは必然的に「分裂」のベクトルです。冷戦時代、イデオロ

ギーによってまとめられていた集団がより小さなエスニーの単位に分かれてゆく。その一方、朝鮮半島のように「統合」のベクトルが働いている地域もある。冷戦下では分断されたいた民族が、冷戦後は逆に統合を志向するという動きですが、これも原初的なエスニーへの回帰という点では本質的には「分裂」のベクトルと同じものです。これら「分裂」「統合」のベクトルが交錯する中で、中国が霸権を狙う巨大なパワーとして台頭した結果、東アジアの「地政学」はまことに錯綜したものとして現出することになったわけですね。

ここで注目したいのは、そもそも「地政学」とは百年以上前の帝国主義時代の理論だという点です。本来なら地政学は現代の国際情勢を読み解くツールとしては不十分なものであり、実際、ヨーロッパではすでに時代遅れの学問とされています。ところが不思議なことに、二十一世紀の東アジアにおいては逆に新たなリティを持ち始めている。

松本　じつに不可思議な現象ですね。おそらくその原因は、日本を除く東アジアの国々は「国民国家」としての歩みを始めて高々二、三十年しか経っていないことにあるのではないか。韓国は全斗煥軍事政権が終わって盧泰愚政権発足（八八年）以降、ロシアはソ連崩壊（九一年）以降、

中国に至っては鄧小平の「南巡講話」（九二年）からようやく国民国家としての条件を整えてきたわけですから、実質的には二十年も経っていないかもしない。周知のように、帝國主義とは国民国家がその発展段階においてナショナリズムを強め、自国の霸権を対外的に投射してゆく過程で生まれるもので、ここ東アジアでは、生まれてまだ日が浅い国民国家同士が経済力の蓄積とともにあって霸権を争っている状況ですから、当然、互いのナショナリズムが強調されて対立する図式になっている。その行き着く先にあるものは、帝国主義的なパワーが衝突する構図です。それゆえ、現在の東アジア情勢を読み解く手段として地政学が最もふさわしくなるのは当然の帰結ですね。

渡辺　松本さんらしい鋭利な分析ですね。

そのような地政学的状況の中での、わが日本だけは、ナショナリズムとはかけ離れた「ポストモダン」の世界にいる。戦後六十年の長きにわたって安穏と過ごしてきた結果、霸権国家体系どころか国民国家という概念すら希薄になってしましました。そして、ふと気がついてみると、日本以外の周辺諸国ではナショナリズムの炎が燃え盛っている。つまり、帝国主義の東アジア地政図に、ポストモダンの日本が乗っかってオロオロしているという非常に奇妙な構図が見えてくるわけです。

『坂の上の雲』に登場する明治期の指導者らは、日本が列強に取り囲まれた厳しい国際情勢を認識し、その上で大変な刻苦勉励を積み上げて西洋文明を自家薬籠中のものとし、この困難な地政学的状況を克服して行きました。日露戦争でコサック騎馬隊を撃破した秋山好古<sup>よしふる</sup>騎兵第一旅團長、日本海海戦でバルチック艦隊を迎撃した秋山真之<sup>さねゆき</sup>作戦主任参謀の兄弟

の出世譚は、この時代を象徴する物語です。

しかし戦後日本では、政治家をはじめ指導者層の発想 자체もポストモダンに染め上げられてきましたね。東アジアの周辺状況を十分認識した上で外交や軍事を論じているかというと、これが甚だ心もとない。現在の日本は『坂の上の雲』の頃より一段と厳しい状況にあるにもかかわらず、ですね。

### 海洋霸権を狙う中国

松本『坂の上の雲』の頃はロシアが東アジアの奥にある最大の宿敵でしたが、いまや完全に中国に代わりました。今年一月の弾道ミサイルによる人工衛星爆破実験や毎年二桁台の軍事費伸長率などが象徴するように、軍事面での蠕動<sup>ぜんどう</sup>が急速に増している感があります。その中国の最大の野望は海洋霸権でしょう。元来、中国は大陸勢力であり、始皇帝の昔から中原を押さえた者が霸者とされてきました。しかし、近年は明らかに海洋霸権を志向しています。これは、対日・対米の世界戦略ですね。

渡辺 中国は黄海から東シナ海を経て南シナ海へと続く長大な海岸線を持つながら、外洋への進出路が極めて限られています。日本、韓国、台湾、フィリピンなどの、アメリカをハブとし、これら諸国をスパートとする安全保障の壁に遮られて、中国は事实上、内海に封じ込められていたのです。しかし、九〇年代前半に南シナ海で南沙諸島を軍事占領

したのを皮切りに、海への野望を顕わにしています。そしてここ数年は東シナ海でガス田開発を進め、日本領海を侵蝕し始めています。一〇〇四年十一月には漢級原子力潜水艦が沖縄・石垣島と宮古島付近で領海侵犯事件を起こしました。中国政府は「技術的なトラブルで迷い込んだ」として謝罪を一切拒否しましたが、潜水艦は中国が「岩礁」と言い張る冲ノ鳥島付近を通過して米軍基地のあるグアム島を一周しています。これは断じて操舵ミスなどではない。

松本 「迷い込んだ」と言いながら、実際は潜水艦の航行経路のために海底の地形を調査し、外洋への抜け道を探っています。中国の国家海洋局には莫大な予算が投下されおり、〇四年から〇九年までの調査で二十億元（約二百五十億円）の経費を計上。調査範囲は約六十七万六千平方キロに達し、「領海に連なる海も対象」としています。日中間では海洋調査について「相互事前通報制度」を設けていますが、中国側はこの取り決めを遵守せず、年間十数件もの領海侵犯・調査活動を続けています。また、空母こそ保有していないものの、人民解放軍の中でも海軍の予算伸長は著しく、『産経新聞』（〇七年二月九日付）古森義久特派員のレポートによると、世界最高性能を誇るロシアのキロ級潜水艦を十二隻配備したほか、弾道ミサイル原潜の建造も開始したという。

日本にとつて最大の懸念は、中国が狙う海域は日本のシーレーンそのものだという点です。中東からの原油を満載した

タンカーや日本から工業輸出品を積んだ貨物船の通り道が「中国の内海」になってしまふわけですから、通商国家の日本としては国家の存亡にかかわる事態です。

渡辺 カギを握るのは台湾ですね。日本列島、台湾、フィリピンと続く島々は地政学でいう「第一列島線」にあたりますが、日米はこの第一列島線を中国の封鎖に使つてきました。一方、中国としては台湾を獲れば外洋進出という積年の夢が果たせる。

そのためにはありとあらゆる手段を用いてくるでしょう。二〇〇五年三月の全人代で、中国政府は「反国家分裂法」を成立させました。同法第八条には「台独分裂勢力がいかなる名目、いかなる方式であれ台湾を中国から切り離す事實をつくり、台湾の中国からの分離をもたらしかねない重大な事変が発生し、または平和統一の可能性が完全に失われたとき、中国は非平和的方式その他必要な措置を講じて、国家の主権と領土保全を守ることができる」とあります。具体的にどのようなレベルで非平和的方式に訴えるのかが全くわかりませんが、要するに中国政府の胸先三寸で台湾をいかようにでも出来るという意思表示、つまり台湾の問題を「国内問題」とし、その将来を決定する「解釈権」を中国が握るという明白な意図の表明です。また、中国が執心する「東アジア共同体構想」も、日本を牽制する道具である可能性が大きい。「戦略的互恵」という甘い言葉で日本を<sup>おび</sup>誘き寄せ、日米間にかかる離間が生じたところでここにクサビを打ち込めば、おの

ずと台湾は中国に取り込めるという戦略ですね。

ともあれ、台湾問題は日本にとって生命線であり、中国の霸権主義をブロックする最後の砦。日清・日露戦争当時は朝鮮半島が生命線でした。半島を通じてせり出す清国やロシアの霸権の等圧線のフロントと闘うというのが日清・日露戦争の本質でした。しかし、現代は台湾が霸権の等圧線のフロントとなつたとみることが正しい。

松本 台湾問題は東アジアに残つた冷戦時代のシッポですが、それと同時に二十一世紀の地政図におけるアタマでもあるということですね。

中国と台湾の関係でもうひとつ重要なポイントは、国家成立の歴史的経緯を振り返ると、国家としての正統性は中国共産党よりむしろ台湾政府のほうにあるという点です。中国政府は「紅軍が日本帝国主義から中国を解放した」という神話をいまだに小学校から教え込んでいますが、実際に日中戦争を戦ってきたのは蒋介石の国民党軍であることは、そのように主張した『氷点週刊』の一時停刊でも明らかになつたように、歴史的事実です。第二次国共合作が成立するまで、紅軍は「長征」と称して奥地に逃れており、日本軍とはろくに戦火を交えていない。それゆえ、一昨年に行われた「抗日戦争勝利六十周年」の記念式典でも、台湾から国民党を呼ばざるを得ない。このねじれた関係が、問題をより一層複雑にしているのです。

渡辺 中国からすれば、国民党を再評価する素振りをみせ

て台湾人の心を「慰撫」しようという戦略もあるのでしょうか。硬軟両方の球を使い分けて攻めるあたり、じつに中国らしいしたたかな外交姿勢だと思いますね。

**松本** 国家の正統性という点では、朝鮮半島にも同様の構図があります。多分に神話的彩りがあるにせよ、抗日パルチザンを率いて日本軍と戦ったとされる金日成の北朝鮮の側のほうに正統性があることは、盧武鉉大統領のみならず大方の韓国人が認めていることです。韓国側は植民地時代には完全に日本の体制側に取り込まれており、日本のシステムの中で出世した者が朝鮮総督府の中にも相当いたわけですから、どうしても北朝鮮に頭が上がらない。

**渡辺** このねじれた構図もまた、北朝鮮に対する宥和的な態度や、南北の統合ベクトルに繋がっているわけですよね。

### 「独立自尊」なき朝鮮半島

**松本** 不思議なことに、朝鮮半島は周囲を海に囲まれているにもかかわらず、なぜか海洋国家としての意識は希薄です。こんなことがありました。私は日韓合同学術會議の日本側の幹事を務めたのですが、二〇〇二年、次の共通テーマを決める際、日本側から「阿片戦争を取り上げよう」と提案したことがありました。阿片戦争は歐米列強の東アジア進出における象徴的な事件であり、当時の日本では幕末の志士から大名に至るまでが戦争の動向を注視し、清の敗戦に終わつた

衝撃から攘夷のための「開国」の気運が生まれてきたのです。それゆえ、韓国にとつても普遍的なテーマだらうと思つていました。

ところが、韓国側からははかばかしい反応がない。よくよく聞いてみると、「朝鮮半島では阿片戦争を危機としては捉えてこなかつた。むしろ太平天国の乱のほうが大きな意味がある」と言つうんです。なぜかと問うと、要するに「我々は海から攻められるという認識がない」というんです。

たしかに朝鮮半島の東側は断崖絶壁が続き、西側は遠浅で船が接岸しにくく、海から外敵が攻め込むのは至難の業です。しかも、陸の守備は脆弱です。朝鮮半島は華夷秩序の圈内で、李王朝も「小中華」を理想としていましたから、中国で一朝ことあらば、その影響は陸づたいに伝播し、たちまち存亡の危機に直結するわけです。ゆえに太平天国の乱は重大だったのです。阿片戦争で、佐久間象山のみならず日本の有名な方が情報収集にいそしんだのと同様に、太平天国の乱ではあらゆる情報収集活動を行つたといいます。

**渡辺** 朝鮮史上、海から攻め込まれたのは七世紀の「白村江の戦い」と、朝鮮戦争の際のマッカーサー将軍による「仁川上陸作戦」ぐらいですね。植生などを見ても、半島は明らかに日本と違うし、気候も大陸性です。そうした歴史や風土の記憶がDNAに刷り込まれているがために、必然的に現在の韓国政府も内陸へ内陸へという志向性を持つということなのでしょう。

しかし皮肉なことに、今日の韓国の繁栄は、朴正熙大統領時代に「海洋国家」を志向して日米と緊密なパートナーシップを結んだことによって築かれたものです。そもそも日本と同じく狭い国土で資源もなく、そのうえ人口も多いのですから、朝鮮半島が生きる道は「通商國家」以外にはなかつたはずです。それにもかかわらず、金大中、盧武鉉政権に南北統合ペクトルが作動し始め、大陸への回帰が始まった。その結果、資本は韓国を嫌つて流出し、IMF危機や産業空洞化で韓国経済はガタガタになつてきましたね。

松本 日本も、海洋国家としてやつてきたからこそ現在の繁栄があるわけですね。

福澤諭吉は「脱亜入欧」と言いましたが、「入欧」とは渡辺さんの言葉でいえばまさに「海洋国家」、すなわち通商国家として生きるという意味です。このリアリズムは、今の時代にも通じる射程の長さを持つていたということでしょう。ところで、福澤自身は「脱亜論」によつて「朝鮮には冷淡」だというイメージがつきまといますが、当時はたいへんな朝鮮びいきだったのですね。

渡辺 ええ、李王朝の反体制勢力であつた独立党の金玉均や朴泳孝らと結び、慶應義塾に朝鮮からの留学生を多数入れて、近代国家制度建設の知識を懸命に授けました。

しかし福澤は、一八八四年に金玉均らが関与した閔氏政権打倒のクーデター（甲申事変）の失敗を契機として、朝鮮に対する態度を豹変させます。まずは「朝鮮人民のためにその

國の滅亡を賀す」という激しいタイトルの社説を『時事新報』（一八八五年八月十三日付）に掲載して発行停止処分を受けたが、その翌々日には「朝鮮の滅亡はその國の大勢に於て免るべからず」と題する社説を掲載しようとするなど、それまでの福澤からすれば信じられないような過激な言説を発表し始める。

この豹変の裏に何があつたのか。朝鮮に対する深い絶望だったのではないかと思われます。朝鮮半島における近代国家樹立のために、福澤はあらゆる協力を惜しまなかつた。にもかかわらず、朝鮮国内では開明派と事大党が内乱を繰り広げ、挙げ句の果てに別々にロシアや清朝に援軍を頼んで外国の軍隊を自ら招き入れるようなことまでやる。「独立自尊」の精神を旨とする福澤にとって、自國の政争の始末をつけるために外国を招き入れようというやり方は、じつに腹に据えかねたのでしょう。福澤の著作物を通して読んで行くと、その思いがひしひしと伝わってきますね。

松本 そうした福澤の軌跡を辿つてみれば、必ずしも朝鮮蔑視や侵略思想から発した言説ではなく、逆に「しつかり独立せよ!」という叱咤激励の喝だつたのではないでしょか。しかし韓国では、福澤は長らく「悪人」とされてきました。韓国では「朝鮮出兵」の豊臣秀吉、「征韓論」の西郷隆盛、そして「脱亜論」の福澤諭吉が「日本の三悪人」と呼ばれています。だから最初、日韓合同学術会議の席では福澤のフの字も言えない雰囲気でしたよ（笑）。

ところが二〇〇二年頃、恐るおそる共通テーマに「脱亜論」を提案してみたところ、あっさり韓国側が引き受けてくれた。あちらの発表者はハーバード大出身の女性で梨花女子大学の助教授の方でしたが、「福澤が脱亜論で説いたのはアジア国家の独立である。ところが当時の朝鮮は自分たちの独立自尊を考えないから、福澤は手を切らざるを得なくなつた。それゆえに、これは韓国侵略論でもアジア蔑視でもない」という趣旨の解説が飛び出して、ずいぶん韓国も変わったなあと驚いたことでした。

**渡辺** それは大きな変化ですね。韓国の知識人にもそうした人材が出てきたことは、非常に嬉しい。冷戦時代は『朝鮮日報』などで、「反日」ではなく「克日」とでもいうべき議論が盛り上がつたこともありました。「なぜ、我々は日本による植民地支配を許してしまつたのか」という反省に出発する思想ですが、私もこれは実りある議論になるかと大いに期待していたのですが、冷戦後は安易なる「反日」に戻つてしまつた。共産主義という敵がいなくなつてしまつたため、自分たちのアイデンティティを保つためには「反日」を掲げるのが最も安直な手段だつたということなのでしょうね。

そして盧武鉉政権下で、もはや「反日」は制度化されてしましました。大統領直属の機関として「親日反民族行為真相究明委員会」を設け、日露戦争開戦時から大東亜戦争終結時までの「対日協力者」の「罪科」をきかんに暴いています。六十年から百年も前のことを「事後法」によつて調べ上げ、

人民裁判的手法で糾弾するなど、近代國家の常識では考えられないことですが、これも歴史の一断面なのかもしれません。

私個人はもともと「親韓派」で、自分の研究も朝鮮半島をテーマにして出発しましたから、多くの友人もいて思い入れもある大好きな国です。それがこんな荒れ果てた状況になつてしまふと、何ともやりきれません。

### したたかな明治のリアリズム

**松本** 福澤の「脱亜論」は、明治期の日本人が持ちえたりアリズムを象徴するものだとみています。他の指導者も多かれ少なかれ真っ当なリアリストでしたよね。

**渡辺** たとえば陸奥宗光。一八九四年に朝鮮で農民による反乱（甲午農民戦争）が勃発し、日清両軍の出兵によつて鎮圧されますが、陸奥は「朝鮮の内政改革を共同で行おう」という提案を清国側に持ちかけます。清国政府側はこれを拒否し、そして日清戦争へと発展してゆくわけですが、陸奥には清が拒否するであろうことをあらかじめ知っていたふしがあります。なぜ回答拒否を承知の上で提案を行つたかといふと、「朝鮮半島近代化のために日本は懸命に努力しているのだ」という姿勢を海外に発信してこの戦いの「正義」を訴えるとともに、日本の国論をまとめあげようという目論見があつたのではないでしょうか。

松本 確かに当時は日本の政治も混乱を極めており、甲午農民戦争への派兵自体も危ぶまれていました。しかし、陸奥自らが使節になつて行くという覚悟を示せば、國論はおのずとまとまるであろうという思想ですね。この発想は、まさしく霸道的リアリズムと呼ぶべきものでしょ。

渡辺 列強ひしめく帝国主義時代の真っ只中で生きた陸奥だからこそ持ちえた、じつにしたたかなリアリズムですね。実際、甲午農民戦争まで続いた日本国内の政治的混乱も日清戦争が開戦してみれば一挙に終息し、逆に国民的支持が急速に高まり、義勇志願兵も非常に多く集まつたそうです。清を懲らしめて朝鮮を近代化させてやるんだという国民の「義侠心」を発揚し、國論を戦争に向けて見事にまとめあげていく手法と戦略眼。これぞ明治のリアリズムでしょう。翻つて現代の日本を眺めれば、政治家らにリアリズムがどれほど残つているのか、甚だ疑問ですね。

松本 明治期に日本人がリアリズムを持ちえたのは、当時の政治家や思想家、いや市井の人々ですら、誰しも「自分が国民国家を背負つていてる」という意識があつたからではないでしょうか。国民国家の草創期には、自分たちが憲法をつくり、議会を開き、国家体制を整えたんだという意識があるし、知識人でも自分の言論が国を動かしてゆくという実感もある。独立自尊の国民意識、いわば「内なるナショナリズム」があつたからこそ、外交においてもリアルな戦略眼を持ち得たのではないか。

一方、当時の清や朝鮮はまだ国民国家ではなく王朝の治世でした。華夷秩序の論理で国内が動いているのだから、リアル・パワー・ポリティクスの発想がない。

渡辺 華夷秩序に挑んだ最初の戦争が日清戦争であるという解釈も成り立ちます。

もうひとつ明治期のリアリズムで象徴的な事例を挙げるとするなら、三國干渉後の日本の政治選択でしょう。日清戦争で日本が得た遼東半島の横取りを企図したロシアは、フランス、ドイツをかたらつてこの領土を清国に返還させる。そしてわずか三年後に自ら租借権を獲ります。この暴挙に対して伊藤博文や陸奥が示した姿勢は、「臥薪嘗胆」をスローガンとし、ひたすら国力の増強に励むというものでした。清国からの賠償金で官営八幡製鉄所を立ち上げ、欧米列強との建艦競争にも伍してゆく。そうやって国力を蓄えた末に日英同盟を結び、日露戦争では見事宿敵ロシアを打ち破ったわけです。

当時の東アジアは生き馬の目を抜く世界でしたから、どの国同士が軍事同盟を結ぶかは、全く誰も予想がつかない。仮に日清戦争で日本が勝つていなければ、清国の方がイギリスと同盟を結んでいたかもしれない。そういう苛酷なパワー・ポリティクスを、陸奥や伊藤は肌で実感していたのでしよう。イギリスだって弱い国と同盟を結ぶはずがない。ならば自国の力をつけることで大国の目を惹きつけ、こちらが同盟の主導権を握れるようにしようという逞しい発想です。朝鮮のよ

うに自ら外国勢力を招きいれる発想とは逆の思想ですね。当時の日本の政治家の凄まじいばかりのリアリズムに、私どもは今日、もう一度目を向ける必要があります。

**松本** 一方、戦争とは逆方向のリアリズムもありますね。

勝海舟は日清戦争には終始反対の立場でしたが、日本の勝利に終わった後でも警鐘を鳴らすことを怠らなかつた。著書

『冰川清話』では、「シナは、ドイツやロシアにいじめられて、早晚滅亡する、などというものがあるけれど、そんなことはけつしてない。膠州湾や、三沙澳くらいの所は、おれの庭のすみにある掃きだめほどにも思つていいだろ」とし、少々の戦勝で清に勝つたと浮かれていては、のちの日本にとつて悪影響を及ぼすであろうと断じています。この大局観の確かさは、現代でも通用するのではないかとさえ思われます。

**渡辺** 植民地に近代国家のシステムを定着させる過程にお

いても、日本のリアリズムは發揮されたと思います。

たとえば台湾。日清戦争後の下関講和会談では、台湾割譲を求めた伊藤に対し、清国側の全権代表・李鴻章は「台湾には阿片、匪賊、風土病、生蕃（原住民）の四害が跋扈し、これは絶対に根絶できない」と、日本がなぜそんな島を欲しがるのか驚いたという記録が残っています。当時の台湾は中華文明の教化の及ばない「化外の地」とされ、清国としてはむしろ厄介払いしたようなものでしょう。

しかし、台湾を得た日本は莫大なインフラ投資を行い、風

土病を根絶して原住民に教育を施し、またたく間に台湾での財政や貿易の黒字が日本に還流してくるシステムを作り上げてしましました。日本によつて移植された文明の下地が今の台湾の繁栄をも支えていることは、台湾の人々も認めてくれていることです。

**松本** 後藤新平の台湾統治の手腕は見事ですね。阿片を禁止にする時もいきなり検挙するのではなく、まずは高率の税をかけて容易に入手できないようにし、人々の反感を徐々に和らげながら最終的に禁止にして行つた。李登輝前總統も日本の植民地経営の巧さを賞賛していますし、台湾の中学生用歴史教科書『認識台湾』でも日本統治時代の歴史が半分を占めています。

### 無理がある「台湾は中国固有の領土」

**渡辺** 翻つて、大陸中国が台湾に何をしてきたかという

と、これが何もしていない（笑）。十七世紀に明朝最後の軍師である鄭成功が台湾に逃げ込んだ時に清軍が上陸しましたが、討伐が終われば何もしないに等しかつた。十九世紀後半になると、清仏戦争を闘つた劉銘伝が台湾の重要性を政府に訴え、台湾省に昇格させて自らここに赴任します。劉銘伝は土地調査等を開始するのですが、残念ながら途中で頓挫してしまう。その未完の事業を引き継いで見事成功させたのが、ほかならぬ日本でした。この事業を担つたのが総督・児玉源

太郎の民政局長として赴任した後藤新平です。

中国共産党政府は台湾には実質的に何の関与もしておらず、少なくとも「中国固有の領土」だとか「祖国統一の大業を達成することは、台灣同胞を含む全中国人民の神聖な責務」(反国家分裂法第四条)などという主張には何らの正当性もないことがわかります。

松本 おっしゃる通り。「台湾は小日本」などと馬鹿げた主張を支持するつもりは毛頭ありませんが、今の台湾社会の文明的ルーツはむしろ日本のほうに繋がっていることが明らかです。

ところが、もうひとつ植民地であった朝鮮半島では、台湾とは対照的に「反日」の世界です。もちろん韓国でも、学校や病院を建設して近代文明を持ち込んでくれたのは日本であるということは、ある程度の教養人なら誰でも知悉している。けれど、それを口にした途端、「賣國奴」とされて職や財産すら失ってしまう恐ろしさもわかつていて、リアルな歴史観がどうしても育ちにくい。盧武鉉政権は「一九〇五年の第二次日韓協約は無効」だとし、二〇〇五年五月の南北閣僚級会談でもわざわざ北朝鮮との合意事項に「日韓協約は無効」という文言を盛り込んでいるほどですが、これぞアリアリズムを欠いた軽挙妄動というべきでしょう。

そういえばこんなこともありました。二〇〇一年十一月、アメリカで「日韓協約は無効」だとアピールするための国際会議が韓国政府の肝煎りで開かれたのですが、参加した欧米

の学者たちは「力の強い国が国際法を盾にして有利な条約を結ぶのは当然であり、どの国もやってきたことだ」などと言いい出し、韓国側の目論見が成立しなかつた(笑)。

渡辺 帝国主義時代に戦った人々に対し「お前は帝国主義者だ!」と罵罵するようなものですからね(笑)。

台湾と比較してなぜ韓国がこれほど凄まじい「反日」になるのか不思議ですが、まったくわからないではない。というのも、台湾は日本統治が始まるまではまさに「化外之地」であり、何の文明もなかつたところでしたから、新たな日本文明を抵抗感なく受け入れた。しかし、朝鮮半島には長い「小中華」の歴史があり、自分たちのほうが文明国で、さまざま文化を日本に送つてやつたのだという誇りがある。

松本 そうでしょう。それに加え、華夷秩序の枠組みの中では日本より朝鮮が上だという自負もあつた。華夷秩序の中では、「皇帝」は中華帝国に一人いるだけで、周辺諸国は「朝鮮国王」や「日本国王」という構図でした。ところが、いち早く開国して近代国家となつた日本が、「天皇」の名前で勅諭を送つてくることなど、誇り高い彼らには我慢ならなかつたでしょう。今でも韓国が天皇を「日王」と呼ぶのは、華夷秩序の名残でもあるわけです。

華夷秩序に固執した朝鮮は、清朝が衰えてくるとロシアに宗主替えし、ロシアが退場すると今度は日本が宗主になつた。そして戦後はアメリカが宗主になり、今は在韓米軍が撤退を始めている中で北朝鮮との急速な宥和にひた走つてゐる

という状況ですね。宗主国が替わる度にナショナル・アイデンティティが根こそぎにされるというのも、華夷秩序の残滓がもたらす悲劇なのかもしれません。

**渡辺** まさに朝鮮半島特有の事大主義ですが、これまたアリズムを欠いた思想だといわざるをえない。さきほどお話しした「統合ベクトル」にしても、韓国は朝鮮民族としての正統性を求めて北朝鮮に磨<sup>なづ</sup>くのでしょうかが、純粹に国民の幸福を追求するなら、日米と手を結んで海洋国家としての道を進んだほうが良いに決まっています。それでも華夷秩序のDNAに動かされて、どうにも解き難い葛藤を内部に抱え込みながらも、結局は大陸を志向してしまうのでしょうかね。

### 同床異夢の「東アジア共同体」

**松本** ところで四月、中国の首相としては七年ぶりに温家宝首相が来日しました。滞在中、温首相は日中両国間の将来目標として「戦略的互恵」というキーワードを繰り返し、帰り際にも「今回の訪日は戦略的互恵のために有意義であつた」とのコメントを発しています。しかし、私にはどうも「戦略的互恵」という言葉が空疎なものに思えてなりません。どうのも、靖国参拝に象徴される歴史認識問題、また東シナ海におけるガス田開発問題など、摩擦となつてゐる懸案事項には何一つ具体的な進展がなく、互いに何を念頭に置いて「互恵」と言つてゐるのかが皆目見えてこないからで

す。

**渡辺** こちらの足を踏んづけているにもかかわらず、お互いうまくやろうじゃないかと言つたところで説得力はありますよね。日中の共通利益としては、①北朝鮮の核開発放棄、②東アジア共同体の二つが挙げられます。周知のように六者協議で中国は北朝鮮の説得に失敗しており、①は事実上破綻しています。残るは②の東アジア共同体ですが、これは設立の前提そのものに重大な疑義が含まれていて、実現の可能性は極めて怪しい。EUの成功を見て、アジアにも共同体を立ち上げたいという気分は危うい。複数の成熟した国民国家がほぼ同水準の経済発展を遂げて水平的関係を築いた欧洲に対し、アジアでは国民国家としての成熟度も経済水準もバラバラであり、共同体を形成する条件はまるで整つてはおりません。東アジア共同体構想は、絵空事だといわざるを得ません。

**松本** 最大の問題は、各国がそれぞれ別の思惑を持つて動いていることです。二〇〇五年の第一回東アジアサミットで日本の小泉前総理は「開かれた地域主義」「自由と民主主義、人権の理念」を強調しましたが、こうした普遍的価値が通じる国家はシンガポールぐらいしかないので現実です。翻つて中国をみれば、米国はもちろんオーストラリアなど民主的な環太平洋国家の参加を頑なに拒み、経済規模からみれば必要不可欠の台湾をあえて外すなど、東アジア共同体を「霸權を握るための場」としていることは確かです。そんな帝国

主義的な戦略を露骨にしはじめた中国を前に「自由と民主主義、人権の理念」といったところで、まさに空夢。

渡辺 同床異夢とはこのことですね。「戦略的互恵」の内容は極めて怪しい。

松本 日中が同じ土俵に立って価値観を共有しているという幻想があるだけで、中身は何もない。いわゆる「ウイン・ウイン」の関係になんぞ、なりっこないわけです（笑）。

さらにややこしいのは、中国は東アジア共同体のことを「新アジア主義」と呼んでいることです。一方、日本においても中川秀直・自民党幹事長らが「新アジア主義」なるものを盛んに提唱し、「アジア同士の交流が国内改革に繋がつてゆく」などと言っている。「アジア主義」という言葉になるとなくロマンを搔き立てられるような感じがするからこう表現しているのでしょうが、同じ用語を使いながらも両者の間には大きな認識のズレがある。

こう考えてくると、そもそも「アジア主義」とは何なのかを、もう一度問い合わせが必要がありそうです。

渡辺 そうですね。その際、まず中国がどのような思惑をもつて「新アジア主義」即ち東アジア共同体に執心しているのかを見極めなければなりません。先ほど議論したように、中国の思惑として伝わってくるのは地域覇権の野望だけです。素直に考えれば、日本人のロマンを搔きたてる「アジア主義」を巧みに操りながら中国の土俵に日本を引きずり込むという作戦意図が透けて見えます。

### リアリズムか、ロマン主義か

松本 「アジア主義」を論じる上で最初に言及しておきたのですが、戦後の近代化論者が唱えた論のひとつに「大東亜戦争はアジア主義者の右翼が起こした」というものがあります。「アジアの解放を目指す」「八紘一宇」などと言つて、結局は大東亜共栄圏という帝国主義をもつてアジアを侵略し、それが歐米列強の権益と衝突した結果として大東亜戦争になった、だからアジア主義が大東亜戦争のイデオロギーだ、という論です。代表的な論者としては丸山眞男がいます。

一方、竹内好はアジア主義者戦犯論には異議をとなえています。『近代の超克』の中では、むしろ「脱亜論」の帰結として日本は欧米列強と同じ帝国主義に走り、その結果として大東亜戦争が起つたという論を提起している。渡辺さんは、どちらの解釈の方に説得力を感じますか？

渡辺 むしろ「日本の蹉跎は、中国におけるマネジメントの失敗だった」という点から議論を出発させた方がわかりやすいように思いますね。アメリカが経済的権益を拡大しようとていた満州に乗り込んで、日本が権益をほぼ独占してしまい、結局はアメリカの敵愾心を煽ってしまった。これがそもそもの太平洋戦争の原因なのですから。

松本 私自身は、満州の枠内だけでみれば、決して日本は

マネジメントの失敗はしていないと思います。満州は「五族協和・王道樂土」というアジア主義的ユートピア思想の実験地でしたが、同時にソ連からの共産主義流入の防波堤の役目も果たしていました。石原莞爾の言うように、この満州の内だけでじつとしておればよかつたものを、盧溝橋事件から中国全土に戦線を拡大して行つたことに失敗の原因があるのではないかという見方です。

それに、中国でうまくアメリカに利益を落とすことで衝突を回避する方法もあつたかもしれません。たとえばアジア主義者の北一輝は、一九三五年の時点で「日米合同対支財団ノ提議」なる建白書を当局者に提出し、日米戦争を回避するために中国からあがる利益は日米が共同して管理し、折半すればいいという大胆な提案をしていました。

渡辺 それは斬新かつ興味深い内容ですね。もし仮に北一輝の提案が実現していれば、日本は中国とアメリカを敵に回した二正面作戦を戦わなくて良かったかもしれません。同時

にソ連の南下も抑えられる。そのリアリズムが残念ながら昭和の軍人には欠けていたということでしょう。

松本 もうひとつ重要なのは、「脱亜論」はあくまでもアリズムですが、「アジア主義」は一種のロマン主義の色彩を帶びていることです。

たとえば石原莞爾を例にとると、中国が辛亥革命で国民家の歩みを始めたのを目撃し、いよいよ中国が近代化すると大いに幻想を抱くわけです。ところが、地方軍閥が割拠し、思うように統一は進まない。そんな有様を見かねた石原は一転して、これは日本が出て行つて統治してやらないことは一歩も進まない、という結論に達してしまう。辛亥革命にはロマンを抱き、「五族協和」を夢見ていた石原だからこそ満州事変を起こしてしまった、という皮肉な逆説です。

しかし、石原の思いはどうであれ、現実を冷静にみれば石原の満州事変は侵略そのものであり、彼のアジア主義は侵略論だったとされてもやむをえない。しかも当時、石原とともに

に満州事変を起こした板垣征四郎や彼らの上司である関東軍司令官の本庄繁は、辛亥革命の際は北一輝とともに民族革命を起こす側にいた人間です。彼らはみなアジア主義者であり、かつロマン主義者でした。彼らの心象風景には、幻想を抱いた分だけ幻滅も大きく、「ならば自分たちでやるしかない」という思いが共通していました。それゆえ、結果だけをみれば「大東亜戦争はアジア主義者が起こした」という見方も出来るわけです。

渡辺 その反省が生きるかどうかの試金石が、まさに東アジア共同体ですよね。発想の根底にある「新アジア主義」なるものは、ロマン主義に他なりませんから。

松本 東アジア共同体賛成論者は「戦略的互恵」や「ワイン・ワイン」などという甘い言葉につられて幻想を抱いているんでしょうが、何がリアリズムであり、あるいは何がロマン主義なのかを冷静に見極めたうえでなければならないはずです。その第一歩として、福澤の「脱亜論」、あるいは岡倉天心や石原莞爾の「アジア主義」にまで立ち返って眺める必要があるということですね。その作業をせずして東アジア共同体を論じたところで、同じ悲劇を繰り返す可能性が非常に高くなってしまう。

渡辺 松本さんは、あえて東アジア共同体構想を現実化するとしたら、どのような枠組みが望ましいと思われますか？

松本 やはり「自由と民主主義と法の支配」という普遍的価値観を共有できる国家になるべく多く参画してもらうこと

が必要でしょう。具体的には、オーストラリア、ニュージーランド、インド、その先にアメリカ。これら海洋国家が入ることによって、大陸を牽制する条件が整うと思います。

渡辺 環太平洋の民主国家の参画が是非とも必要ですね。あまり世間の注目を浴びないニュースでしたが、今年三月、オーストラリアのハワード首相が来日して「日豪安保共同宣言」に署名したことは、日本の安全保障にとって非常に重要な出来事だと思います。オーストラリアには「法と自由と民主主義の支配」の普遍的価値観があります。オーストラリアが東アジアの国々の中から日本をパートナーに選んだのは、日本にとって心強いことです。

案の定、中国政府はこれに不快感を示してオーストラリアにまで「従軍慰安婦問題」カードを切り、韓国も駐豪韓国大使がハワード首相に「透明であるように」と警告を発します。裏を返せば、中・韓両国は「法と自由と民主主義の支配」の普遍的価値観を共有したくないと言っているに等しい。こんなことからも東アジア共同体を巡る各国の思惑の違いが察知できます。

### まずは「個別的自衛権」の確立を

渡辺 ところで、北朝鮮の核開発問題が依然として東アジア最大の不安定要因ですが、昨年来のミサイル発射と核実験をどうご覧になりますか？

松本 現時点では日本のミサイル防衛システムは発展途上段階であり、即座に対応できる状況にはありません。北のミサイル基地をブースト（発射直後）段階で叩くという能力も検討しなければならないでしょうが、憲法改正やその他の法整備も含めて考えると、これも相当な時間がかかる。

その一方で台頭してきたのが「核武装論」です。しかし、

さまざまな観点から考え合わせると、日本の核武装はリスクが大きすぎると思います。世界中のIAEA加盟国を敵に回し、しかも日本の安全保障の最大のパートナーであるアメリカの面子を潰すことになるのですから、あまりにも失うものが大きすぎます。

渡辺 私も松本さんとほぼ同意見ですね。もちろん核保有の能力はあるでしょうが、現時点で保有するのはリスクが大き過ぎます。しかし、北朝鮮情勢から世界の目をそらさないためにも、「いざとなれば日本も核開発の覚悟はある」というメッセージを世界に向けて発信することも必要だろうと思

います。

松本 そういう発想こそ、「脱亜論」以来のリアリズムを受け継ぐものでしょうね。

渡辺 それに加えて、集団的自衛権を論議する前に、日本はまずは個別的自衛権を行使できる態勢を確立することが肝心です。

つい先頃、私はある月刊誌用の原稿に「(北朝鮮が日本に核ミサイルを撃ち込んできても)日米同盟に頼るまでのことはあるまい。日本に向けての核兵器発射は、日本の個別的自衛権の発動を促し、遊弋する海上自衛隊のミサイルによっても平壌を倒す力は日本にある」と書いて送ったところ、編集者から「自衛隊にそのような能力はないのでは?」と疑義がついた。そんなはずないと知り合いの防衛専門家に訊いてみたところ、「自衛隊に北朝鮮を倒す能力はない」と即答されてしまい、慌てて削除したものです(笑)。

よくよく調べてみたところ、現在の日本の自衛隊の戦力構

成は極めて強く抑制的であり、たとえばP-3Cの潜水艦追尾能力やイージス艦のシステムは世界一のレベルにあるもの、空中給油機もなければ弾道ミサイルもなく、単独での北

朝鮮攻撃は事実上できないそうです。核弾頭を落とされても、ですよ。

松本 つまり、自分で自分の身を守れない、個別的自衛権の発動すらできないというわけですね。そんな状況で集団的自衛権などと言ったところで、何ら現実味が感じられません。

それに現在、米軍はアメリカ本土を守ることを第一とした世界的なトランシスフォーメーション（軍事再編）を進めており、徐々に世界各地から退いています。北朝鮮を睨む在韓米軍もその例に漏れず、二〇一二年までに戦時作戦統制権が韓国軍に移管されることが決まっています。つまり、米軍は全体的に手薄になっており、ただでさえアフガンやイラクに足を取られているのに、いざというときに朝鮮半島をどうにかしてくれるだろうと思うのは甘すぎるでしょう。

渡辺 もし仮に米軍輸送機が北朝鮮に攻撃されたとしても、日本の戦闘機がそれを助けられるかは極めて怪しい。自衛隊が米軍を助けられなければ、アメリカは民意が即座に政策に反映される国ですから、日米安保廃止論がすぐに持ち上がる。そうしたら、日本はたちまち中国に呑み込まれてしまいます。やはり、自分の国は自分で守る覚悟を持つべきですし、それがリアリズムというものでしょう。

## ナショナリズムを取り戻せるか

松本 さて、日本を取り巻く状況が『坂の上の雲』の頃になくな不安があるのは、現代の日本人の精神は『坂の上の雲』の頃とは著しく変わってしまったという点です。当時は国民国家の勃興期ですからナショナリズムが高揚し、一人ひとりが国民意識を持って各々の持ち場で力を発揮していました。そして、皆がそれぞれ小さな歯車を一生懸命回して行つた結果、強大なロシアを倒すことが出来たのです。ところが敗戦後、「ナショナリズムは悪である」という前提の戦後教育が行われるようになり、ナショナリズムを語ることさえ難しくなってしまった。

私自身はナショナリズムは善でも悪でもないという認識なのですが、それでも「右翼」扱いされたほどです（笑）。戦後教育の中でナショナリズムが極端に忌避された結果、現代の日本では一人ひとりが独立自尊の精神を持つて国家を支えてゆくとの意識が極めて希薄になってしまったような気がします。

渡辺 まつたく同感ですね。この六十年間、日本人に最も欠けていたのは国民国家としての一体感と「公」の精神ではなかつたか。それを非常にわかりやすい形で知らしめたのが、皮肉なことに北朝鮮による拉致事件だったと思います。

自国民を拉致されたのに北朝鮮から取り戻そうとしたかった。政府や政治家は、まったく「公」に奉仕する精神を持つてはなかつたことが暴露されてしましました。拉致被害者の曾我ひとみさんが帰国後に作った詩の中の「人々の心、山、川、谷、みんな温かく美しく見えます。空も土地も木もわたしにささやく、お帰りなさい」という一節は、何よりも郷土愛の大切さ、共同体の価値の高さを私どもにあらためて教えてくれました。北朝鮮による拉致事件は、戦後六十年間麻痺してきた日本人の精神に、国民国家の成員としての意識を呼び覚ましたのではないでしょうか。

松本 日本国、日本人がどうあるべきかというナショナル・アイデンティティの再確認も必要とされます。「ナショナル・アイデンティティ」の訳語には「国体」という日本語が最もふさわしいのですが、戦前の「天皇は万世一系の現人神」という国体論のイメージが強すぎて、この訳語は用いづらい。しかし、あえて国体という言葉を使わせてもらうなら、「戦前の天皇を中心に据えた国体論から、戦後は一転して「平和国家・日本」という国体論の繭に閉じ籠つてしまつたといえるわけです。そして現在、このグローバル化した国際社会の中で、日本はどのような国家・国民として生き残つてゆくのか、国体論をあらためて形作つたうえで全世界に向けて明確なメッセージを発信しなければならないと思うのです。

渡辺 そのためには、まず自国の歴史を知ることから始めなくてはなりませんね。歴史を知らなければ、郷土愛や共同体への帰属意識、ましてや国家観が生まれてくるはずがない

のですから。この頃よく思うのですが、いまこの世の中に生きている者の都合が最優先という現世利益主義、唯物主義が日本の伝統文化を破壊したのではないでしょうか。歴史ある地名をカタカナに変更したり、皇統の継承を「有識者」があれこれいじるのを見ていると、どうして日本の文化的伝統、歴史の重みを感じることはないのかと不思議な思いに駆られます。

松本 唯物主義ではなく「唯今主義」でしょうね（笑）。そして本日見て来たように、先人たちの思想を再点検するところから現代にも通じる思考を汲み取り、我々の血肉としていかなければならぬとも思います。それによつてナショナル・アイデンティティ、つまり国体の再構築も可能になるのではないかでしょうか。

最近、戦後の国体論から派生してきた悪弊も徐々に変わるものではないかという兆しが感じられるようになつてきました。安倍政権は「戦後レジーム脱却」を掲げて「憲法改正」と「教育基本法改正」を旨としてきましたが、すでに五項目まで登つた印象があります。具体的な成果はまだまだこれらですが、戦後は金科玉条のごとく一切手を触れられなかつたこの二つのテーマに取り組んだという姿勢自体が評価に値します。

渡辺 ようやく日本人の持つ底力があらわれて、時代の潮流が変わりつつあるのかもしれませんね。私は日本の将来をけつして悲観してはいません。

松本 今日は有難うございました。